

---

# まい・らいふ・あず・あ・び～ちほ～る

けいむ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

まい・らいふ・あず・あ・び〜ちぼ〜る

### 【Nコード】

N9744F

### 【作者名】

けいむ

### 【あらすじ】

「鋼の錬金術師」二次創作作品です。金髪おさげの少々ミニサイズな美少年？にして隻手隻足の機械鎧オートメイルで武装する兄、エドと、無骨で巨大な鎧に魂をつながれ仮の身体として生きる弟、アル。この錬金術師兄弟は、重い過去を背負いながら、喪われた身体を取り戻すという目的に向けて、鋼の意志を持って、軍の任務と真理の探求を兼ねた冒険の旅を続ける・・・。その旅の途中で、幸か不幸か2人に出くわしてしまった青年を主人公に描きました。平凡で夢のない彼が、無理やり強要されて、錬金術の力でこうなりたいと願ったもの

とほつぷりぞろろー読んでさい。

まい・らいふ・あず・あ・び〜ちぼ〜る

(「鋼の錬金術師」二次創作)

『世界は 金の縦系と  
麻の横系でつむがれた  
タペストリー

おいらは その表面からほつれて  
ぶら下がり  
やがて落ちていく 横系の切れっ端』

・・・そんな歌、どこかであったっけ。  
ここに来るとなぜだか  
詩人まがいの連想がつい頭に浮かんで、  
それで何でかな、余計に気が滅入ってしまう。

ここ。強風の吹き抜ける絶壁。  
苔しか生えない岩場のすぐ先は  
空につながっている。  
その境目から下を見下ろすと、  
貴族のお屋敷の数十倍はあるうかつていう  
一枚岩の崖が延々と連なり、垂直になだれ落ちている。  
白波の立つ磯ははるか彼方。

仕事の合間、よくここに来るようになった。  
仕事、か。いや、訂正。手伝い、だよな。  
じっちゃんか、余生の楽しみについて始めた

海の家の管理、っていうか、

ほとんど二人だけで切り盛りさせられてた。

そのじつちゃんにもこないだ

永遠にトングラこかれてしまった。

ムネン、アトヲタノム、って

にやっと銀歯を輝かせて言い捨てて

逝っちまったが、あほか。

俺ひとりで、どーしろってゆうのさ。

他に頼れる身寄りもない。

学校の寄宿舎にでも戻るしかないか。

まだ籍が残っていればな。

ただなあ・・なーんか、たるいんだよなあ。

別に嫌われてたほどでもないと思うけど

トモダチならともかく友人がいたとはいえないし、

もうすっかり忘れられてたりして。

それに大体、勉強したって何の役に立つのさ。

世のため人のため？

こんな、つかみどころのない

いつだってどこかで争いが絶えない

明日も知れない世界のために？

他のひとのことなんて

本当は気にもとめない

自分のことで頭がいっぱいの人たちのために？

モノを作ったり、壊したり、繕ったり、交換したり。

その何が楽しいんだらう。

楽しくなくても生きるためには

何かしなきゃいけないのかもしれないけど、

じゃあ何をすればいいのか。

何がしたいのか。

ふだん何も考えてないせいで頭がさび付いたのか、何も思いつかない。

・・第一、こんなことうだうだと考えること自体、うっとうしい。こんな俺なんかここに或ることに一体何の意味があるんだろう？

いや、別に、意味なんてないのかも。

誰に必要とされてるってこともないし、さ。たぶん。

つい目が、

目と鼻の先にある地平線に向いてしまう。

大地と空の境。

それまで、

ジサツ、なんて、考えたこともなかったし、今もそんなつもり一向にない、はずなのに、何だか、ちよつとしたノリだけで

ふらつと身体を泳がしかねない

奇妙な誘惑に心がふらつきかけた

その時、だった。

あいつらに出会ったのは。

「すみませ〜ん。そこのおにいさあ〜〜ん」

かなり後方から声がかかった。

なぜかエコーがかかったような、子供っぽい声。

振り向くと、うわ、何だあれ。

いかつい無骨な巨人が

ぶんぶん手を振っている。

鎧、なのか？鉄人二十何号、って感じ。

「手を貸してくれませんかあ〜？

にいさんが倒れちゃってえ〜」

やはり、あの鎧の巨人からの声らしい。

それにしては鼻にかかった少年合唱団っぽい可愛らしい声。  
うーむ、らしくない。あやしい・・・。

ともかく、ちょっと警戒しつつ

そばに近づいてみた。

「兄さん、つて??どこだい」

「え?ほらほら、ここですよお」

鎧男が指さした足下をよくよく見ると、

ちっちゃい子供がばったりうつ伏せに伸びている。

編んだ金髪を後ろに垂らしている。

赤いコートを羽織っているうえ、白い手袋まで。真夏なのに何ちゆ

う暑い・・・。

「熱中症かい?この暑さだもんなあ」

「いえ?たぶん、お腹が空いて、だ・・・」

鎧男は幾分肩をすくめたように恥ずかしげな声を出す。

エコーはこの鎧の中での反響か?

あんたも暑くないのか、こんな鎧なんかかぶってて・・・、と

つつこむのは後に回して、兄さんとやらの肩をゆすってみる。

「もしもーし、だいじょうぶ?」

ぐきゅるるる。腹の音だけで答えてくる。

「このへんって、食べ物屋さんとかありませんか?

手持ちの食料が切れちゃってて・・・」と、鎧男。

「じゃ、うちに来るかい?

もうすぐ閉めるんだけど、

一応、海の家だし。」

「ええっ。わあ、僕はじめてですっ。海の家って。

どんなのかなあ。ぜひお願いしますっ。ねっ早く行こうよ、兄さん

っ

鎧の奥の目をキラキラ光らせてはしゃいでる。

図体はでっかいが、まだ子供なんだろうか?

腹の音だけさせて伸びたまんまの兄さんを

鎧の弟と一緒に助け起こす。

「よつこらしよつと。あれ、軽いと思ったら  
ずっしり重いな。」

ところで、ほんとに君の兄さん？

「ずいぶんとちつちやい・・・」

「わわわっ、それは禁句・・・」

弟が言い終わらないうちに、  
ぐったりしていた兄が急に身を起こして  
白目を向いて怒鳴りだした。

「きつさまあああ〜っ。だあれが、スプリング8でしか検出できな  
いほどの

微量元素ナノグラムとチビかあっ!!」

「に、兄さん、何もそこまで・・・」

また弟が言い終わらないうちに、またがっくり首を前に垂れてしま  
った。

「はあ、よかったあ。エネルギー切れしたみたいで」

「・・・きみの兄さんって、一体・・・」

\*\*\*\*\*

がつつがつつがつつ。

ポークに衣をつけて揚げたカツレットに

玉葱などのソテーを添えて

玉子でとじたものをライスの上に乗せた

即席料理を出したら

ちび兄さんのお気に召したのか

文字通りイ又食い状態で

何杯もおかわりを催促された。

確か、カツドーン、とかいったっけ、

じつちゃんが東方の島国に遊びに行った際  
レシピを学んできた料理の一つだ。

鎧の弟は、表情が伺えないものの雰囲気から察するに  
あきらめ顔といった感じで横に座っている。

「きみは食べないのかい。兄さんがさつきから  
勝手に引ったくって食ってるけど・・・」

「いえつ、僕は、ちよつとダイエット中で・・・あははは」  
・・・あやしすぎる。でも、それだけに  
下手に詮索するのはやめといた方がいい、と  
己の本能が告げている気がする。

「どう？おいしい、よね、兄さん。」

「もふもふ。ん？まあな。」

魚の薫製からとったエキスか何かを  
隠し味に使ってるようだな。

そいつはいいとして、玉子が半熟を通り越して  
ちよつと固いかな。もう少し熱の通し方を・・・もふもふもふ  
兄はちよつとうるさ型グルメっぽいけど、  
その割にはよく食ってくれるもんだ。

「ふう。いやあ。食った食った。」

この料理これだけ食ったのも

アクロイヤの街の警察署以来だったな、確か」

「ああ、怪盗サイレン・・・いや、クララさんの街だったよね。  
どうしてるかなあ、あれから」

「・・・さあね。また脱獄して刑事のおっさんと  
おっかけっこでもしてんじゃねえの？

昔のマンガのドジ刑事ってタイプだったもんな、ありゃあ  
・・・何だかぶっそうな話をしてるようだ。

これまでに警察の世話になるようなこと  
やらかしてきたんだらうか、やれやれ、まだ子供なのに。

兄はずずとお茶をすすって席を立った。

「やあ、あんだ。すまなかつたな、ごちそうになっちまって」

「へ？・・・いや、まあいいんだけど。もう店じまいしてるし」

「もう兄さんつてば！すみません。お金は払いますから・・・  
つて、あれれ、財布は？兄さん」

「ええ？お前に預けなかつたか？」

「預かつてないつてば。トランクの中は？」

「がさごそ・・・ないな。ちなみに服のポケットも

みんなすつからかんだ。抜かれちまつたかな、こりゃ」

「そーんなあ。困つたな・・・ええと、この近くに

軍の・・・」

？何か言いかけた弟の口（つていうか

ギザギザの金具の合わせ目しか見えないけど）を塞ぐようにして  
兄があわてて言った。

「いやいやいや、近くに電話がないかなあって」

「ここはもうすぐ引き払うんで電話止まっててね。

そつだな、歩いて一時間半くらいの所に

町役場があるから」「うわ、すつげえへキチ」「兄さん！」

「料理代のことなら心配しなくていいよ。

金を貸せ、つて言うんだつたら困るけど」

「そんな滅相もない。本当にいいんですか？済みません。

ほら兄さんもお礼言わなきや」

・・・弟はでかい身体に似合わず礼儀正しいな。

いばりん坊の兄のせいかな、かなり苦労性のようだ。

その弟のフオーにも関わらず

兄は、ちよつとへそを曲げてしまったようだ。

「いや、おごられつぱなしでさよならするつてのも

何か気に入らねえな。第一、

錬金術師の等価交換の原則にもとるだろ」

「へえ、きみ錬金術師なんだ。」

「ん、まあな。一応こっか、・・・いや、流しの錬金術師だ」  
流し？酒場のギター弾きじゃあるまいし。まあ、旅がらす、つてこ  
とか。

「でも若すぎないか？俺も学校で  
習い始めたばかりなんだけど」

「教わるような学校が村にはなかったからな。

アル・・・こいつと一緒に、家で勉強を始めて、

それから師匠について・・・後はほとんど独学だったな」

「ふうん。すると、鎧のきみも錬金術師か。」

「うんつ。何か修理するものとかありますか？

お礼に出来ることがあれば・・・」

「そうだなあ。でも、さっきも言ったけど

もうここは引き払うんで、建物ごと壊されちゃうからなあ。

うちの爺さんがこの海の家のおーナーだったんだけど

こないだぼつくりと逝っちゃって・・・」

？何だか兄弟とも急にしんみりしてしまったので

あわてて話題を替える。

「あ、今夜の宿はどこか決まってるの・・・って

宿代がないか。何だったらここでどうだい。

もう日暮れだし、夜が明けてから街に行けば？」

「ええつ、そんな、有り難いんですけど

何だか申し訳なくって・・・」

「まあアル、いいじゃねえか。今のところ急ぎの旅でもねえし、

親切に甘えさせてもらおうぜ。わりいな、一晚厄介になるぜ。

俺はエドって呼んでくれ。こっちは弟のアル。よろしくな、あんち

やん」

エド、と名乗った兄の方は、一見気むずかしそうに見えるが、

にかつと齒をみせて笑った顔はまだ子供っぽい。

言葉遣いはぶつきらぼうだが

悪い奴ではなさそうだ。



あんたには将来の夢も希望も、まるで、なーんにもない、ってことか？」

「うーん、まあ、なるようにしかならない、って感じ、かな」

「ばかやるお。そりゃ急流でボートこいでる最中に

オールを放り出してやーめた、って言ってるのど変わりねえだろ。

そのままひっくり返って死んでもかまわないのか、あんた？」

・・・すぐに答えられなかった。

なぜか、あの崖のことを思い浮かべてしまった。

「・・・まあどつちだっけいいけどよ。

俺たちは、死んだってオールは放さねえけどな。

どこまで行けるか、近づけるかはともかくとして、

どうしてもたどり着きたい場所があるからな。

そこに着くまでは、どんなにあがき苦しんだって、

格好悪くたって、ただ漕ぎ続けるしかないんだ・・・」「兄さん・・・

彼ら兄弟は、よっぽど重たい、奥深い事情を抱えているんだろう。

聞き出すのははばかられたし、二人とも多くは語らなかったが、

そのことだけは察することができた。

比べてみると、俺の方には何にもない。

錬金術を学ぶ理由も、生きる目的も、何もかも。

彼らのような重荷を背負うのは到底自分には無理だと思うし、

身軽なのはある意味でラクなんだが、

どうしてだか彼ら兄弟が羨ましいような気も少しだけした。

「ねえ、あんた。本当に死にたいんなら、

手伝ってやるうか？」

「あわわ、兄さん、気は確か？」

「ご、ごめんなさい。酔っぱらいの冗談ですから、たぶん・・・」

「うひいっく。うんにゃ、マジでシラフだぜ、今夜の俺は。

依頼人の依頼にパーフェクトに応えるのが

ヒットマンとしての職業倫理つてもんだろつ、なあアル」

「れ、錬金術師はヒットマンじゃないつてばあ」

「い、依頼なんてしてないぞ。別に死にたいだなんて・・・」

「ふん、死にたくもない、生きたくもない、かよ。ぜーたくだねえ。そういう中途半端なのが一番嫌いだね。」

それじゃあさ、明日の夜まで待つてやるよ、殺すの。

それまで一日、何がしたい？何がほしい？何になりたい？

言っとくけど、これが最後の質問だからな。ちゃんと答えろよ、あんちゃん」

・・・目がすわってる。やばい、やばすぎ。

この質問にまで、あいまいな答えを返したら

何をしてくすかわからないな、このかんしゃく玉野郎・・・。

目をつぶって、最初に浮かんだビジョンを

自然に口に出すしかない、か。ふう・・・。。。

\*\*\*\*\*

「そ〜れっ」

ぼーーーーーん。

青々とどこまでも瑞々しい夏空。

炎の矢のような太陽光線の放射。

エネルギーッシュに立ち昇る入道雲。

その真っ只中へ

まるで胴上げみたいに

ふわり舞い上がり、

そして重力に惹かれてすうっと落下していく。

「は〜い、パ〜ス」

また、ぼーーーーん。

黄色い嬌声と同時に  
白い掌に弾かれて、  
繰り返し、繰り返し、  
空を遊泳する。  
爽快。その一語に尽きる。

「なあ、アル」

「んー？なに、兄さん」

「・・・世の中って広いよなあ」

「うん、そうだね。海は広いぞ、  
でっかいぞ」 ってね。」

「いや・・・そういう意味じゃなくってさ、世の中には  
いろんなヘンタイがいるもんだなあって、さ」

「ヘンタイ？誰のこと？」

「あれだよ、あれ」

・・・あの黄色い豆粒頭、エドかな？

何だかこつちを指さして、ヘンな顔してるような  
まっいいか。気にしない気にしない。

生まれてこの方初めての

こーんな楽しい気分

自分から水をさすことないない。

、なーんて思ってるうちに、

わっ、着水。

寄せては返す波間にぶかぶか浮いてる。

これも悪くないな。安楽椅子に揺すられてる気分。

「でも、兄さん、すごいよね。」

魂の物質への定着に成功したのって

僕の時が続いて二度目じゃない？」

「人聞き悪いこと言うなつ。」

失敗したことがあつたみたいに  
聞こえるだろつ。お前の時以来

こんな錬成やったことなかったぞ」

「そうだったよね。でも普段じゃ

こんなこと出来ないよね。」

シラフじゃなかったから、かなあ」

「ああ、実は・・・自分でもどうやったのかよく覚えてねえんだ。

ちゃんと元に戻せるかなあ、自信ねえよ、俺」

「・・・まあまた、やだなあ兄さんつてば、そーんな冗談・・・」

「・・・」

「ど、ど、どうして目をそらすのさ、兄さん・・・」

「・・・」

・・・海岸ではエドが今度は

わしゃわしゃ金髪をかきむしるような仕草。

鎧のアルがいつになくあわててる様子。

何やってんだか・・・まあいつか。

「わあい、つかまえたつ」

むぎゅうつ。おおおおつ。

女の子の柔らかかみがビキニ越しに

ぎゅぎゅうつと伝わってくる。

水着と素肌が、

海水のぬるぬるつとした感触とあいまって

ビニールの表層にこすれて、

全身に甘美なバイブレーションが

響き渡っていく・・・。

「ああつ、大体あいつが悪いつ。」

何だつて、あんな突拍子もねえリクエストを・・・」

「びつくりしたよねえ、まさか

ビーチボールになりたいたい、だなんて・・・」

「あほか、って張り倒そうかと思っただんだ。

ほんとにあの時そうしときゃ良かったんだけどさ。

ほーら、やっぱり』これ以上分割不能な究極最小クオークどチビ』  
には

無理だろ、なーんて言われちまって、ついカーっとなって・・・」

「言っていない、言っていないって・・・」

「きゃはは、ほーら、サーブっ」

ぱーん、平手打ち。

うーん、いいねっ、このしびれる刺激。

きゅきゅっど回転が加わり

放物線の軌道に

ふうわりと微妙な変化がつく。

「はいっ、回転レシーブっ」

お、やるね、お嬢ちゃん。

なかなか身のこなしが機敏だ。

ロングの金髪にぱっちりした碧眼。

足もすらっとしてて

スタイルもなかなかの美少女。

マンガならヒロイン当確、だな。

ちなみに、この子は

あの兄弟の幼なじみらしい。

仕事仲間の女の子達と旅行で

たまたま海水浴に来ていたとか。

うーむ、なーんて妬ましい、いや、羨ましい偶然。

それにしても、浮かない顔だな、あいつら。

「ねえーえ、あんたたちもやらない？ビーチバレー」

向こうの方で砂の上に棒つきれで何やら書きながら  
ぶつくさ議論し合ってる凸凹兄弟に

お嬢ちゃんが声をかけた。

「ウィンリイ、せ、せつかくだけど、今それどころじゃ  
「なーによ、いつも忙しがっちゃって。」

たまには仕事忘れて遊びなさいよ。

ほらほらほらあ。こーんな水着姿の美少女が誘ったげてるのに  
浮き浮き気分にならないのかなあ、君たち。

「・・・もういいよ、知らないっ、くつすん」

「う、ウィンリイ・・・何も泣かなくなったって・・・」

「気にすんなって、アル。どーせいつもの泣き真似・・・」

「・・・この、ばかあっ」

すばー！ー！ー！んっ！！！！

うおっ、

どこに隠し持ってたのやら、スパナー閃。

豆粒エドが吹っ飛んだ。

可愛い顔して、凶暴そうだなあ、あの子。

弟アルまで恐怖に巨体をすくめ、がたがた鎧を震わせている。

あの兄弟の姉御、って位置関係だったりして。

あーんな裂帛アタックをくらったら

このボールなんか裂けちまうかも・・・ぶるぶるぶる。

彼女の女友達たちは、その痴話げんか？には気づかず  
リレーに花を咲かせている。

「あっ、ちよつと空気抜けてるかもあ、このボール。

膨らましておくね。ぷうー！ーっ、ぷうー！ー！ーっ」

おおおおおっ、こ、こいつは、すげえっ！

俺の先端のノズルに、女の子の唇がねぶりつき、

紅いほっぺをぷうっつて膨らませて、

へしゃげた俺の腹に、熱い息を吹き込んでくれる。

まさに精気を注ぎ込まれているみたいだ。

身体全体に張りがみなぎるのが実感できる。

これほどに満ち足りた官能があつたとは、はああああ・・・。

「ほーら、ぱーんぱんになった」

自慢げに女の子は

はち切れんばかりの俺を

ぼんぼん掌の上に弾ませる。

「そんじゃー、またいつくよー」

すぽーん。

さつきより一段と高い飛翔。

充実。それ以外の言葉なんて要らない気分。

ずるずるずる。

ウィンリイが、

きゅーっつと目を回している二人を引きずって

波打ち際に戻ってきた。

「ぜえぜえ。こうなったら

意地でも遊んでもらうんだから。

ほらっ、とっつと起きろっ、二人ともっ」

「・・・兄さん、不本意だとは思っけど、

これ以上の抵抗は命に関わるかもね・・・」

「・・・ああ、俺もそんな気がしてきたぜ、弟よ・・・」

エルリック兄弟も、ビーチバレーに無理やり

参戦させられる羽目になった。

エドは、・・・へえ、片手片足が機械鎧、オートメールか。

そのせいで、あれだけちっこい・・・いや、ほどほどサイズなのに、あの時重たく感じたのか。

トランクス一丁になって、ぼきぼき腕を鳴らしている。

アルは・・・まだこの期に及んでも鎧を脱がないらしい。

この炎天下なのに・・・死ぬぞ、そのうち。

衣類は、ふんどし一丁・・・？あれって、もともとふんどしなのか？

「ああ、もうつ、やけくそだ。

ようし、やるからにはやってやるぜ。

破けても悪く思つなよ、あんちゃん。

いくぜえつ、フルメタル・サンダーstorm・サドンデスサーブつ  
つ」

うわ、エコーかかっているぜ、技の名前に。

こ、こいつは来るつ、腹をくくつて衝撃に備えた。

・・・・・・あれ？

何のインパクトを受けないまま

ぼとりと砂に落ちた。

エドは？と見ると、

砂の上、うつ伏せに、こけている。

しかも・・・右腕のオートメイル、

ひじから先、ブランブランと外れてるようだ。

「て、てめえ、ウィンリイつ、

さつき肘からネジ一本抜きやがったな・・・」

「ほーほつほつほ。

真剣勝負に手加減はなくつてよ。」

「え、笑顔に鬼が入ってるよ、ウィンリイ・・・。」

・・・こ、怖い。これが本性か。

きれいな魚には毒がある、

色鮮やかなキノコにも毒がある。

じつちゃんの格言もバカにならねえな。

この幼なじみの嬢ちゃん自体も、

この兄弟の背負ってる運命の重荷の

一つ、だったりして。苦勞するなあ、あんたらも・・・。

「ほらっ、受けてみなさい、  
スパナタイフーン・カミカゼアタック・ウィンリィスペシャルっ」  
「何のっ、スーパーソニック・マイクロウエーブ・バク転レシーブ・  
って

誰がマイクロだっ、誰がっ！」

「わっ、兄さん、よけてっ・って、あー、吹っ飛んじやった。

じゃあ、リバウンドを僕が、えーと、アル・アル・

うーんと、うーんと、っただのレシーブ」

はあ、助かった。

弟も馬鹿力っぽいし、

あの角みたいな所に当たったら

もう、ぷしゅーって一気に破けてしまいかねない。

次第に、リレーは狂気を帯びてきた。

特に意地っ張り同士らしい

ウィンリィとエドとの応酬は熾烈を極め、

じわじわと、俺の肌、っていうか、

ビーチボールの表面が

ボディブローのようにダメージを蓄積していくのが

身をもつて、命を削り取られていくように感じ取れた。

まだかなっ・っそろそろ、っいくら何でもっ・

おい、まだかよっ・っいい加減にしろっ・っわあ たっ、

もしかして、お前ら、止める気ないのかっ・

俺を殺す気かっ・っうぐわっ、

っいや、そうなのかっ・っわかったぞ、

戻せないんだな、元通りにっ・っだからっ・

このままっ・ボールのままっ・あの世へ、ってっ・

は、はは、ばかなっ・っそんな、そこまでっ・

いや、やりかねないっ・っや、やめろっ・っぐぶおえっ、

うそだろっ・っもうやめてくれっっ・

限界、もう限界だ。ギブ、ギブ。

タオル投げてくれれば。

降参、参ったつてばさ。・・・

・・・なあおい・・・頼むよお・・・もうギリギリだあ・・・

・・・悪かった、ああ、悪かったさ、

嘘だよ、死にたいだなんて、

嘘だつて、そんなつもりさらさらねえつて、

いやだよ、まだ、死にたくない、

死ぬなんて、嫌だ、・・・助けて・・・

この世には、つまんない、つらいことだけじゃなくつて

もつと素晴らしいことだつてあるはずだつて、

やつと分かりかけてきたのに・・・

やること、なくつたつて、

今なくつたつて、いつかきつと・・・

だから、わあああつ、もう許してくれえ・・・

「ほおつ、なかなか楽しそうじゃないか、

鋼の。」

そこに、やけに透る涼しげな男の声が砂浜一帯に響き、

狂乱のリレーは一旦収まった。

はあはあはあつ、た、助かった、のか？

もしや救いに駆けつけてくれた天使か？

「マ、マスタング大佐・・・に、ホークアイ中尉・・・」

「お二人はデート、ですか？」

「な、何を言うのです、不謹慎なっ」

・・・と顔を赤らめつつ、男の傍らのひつつめ髪の女性は

背中まで隠れるスポーツウエアっぽい黒い水着をつけている。

マスタングと呼ばれたクールな二枚目男も、海パン姿に小さめのサ

ングラス。

上からパーカーを羽織っている。

軍人らしいが、どう見てもプライベートの雰囲気だな、こりゃあ。

「視察、だよ。間抜けな部下の帰りが遅いんで、金でもすられて路頭に迷ってるんじゃないか、ってな。」  
「にやり、と何もかもお見通し、って感じの笑み。」  
部下、って、エドのことか？

あいつ軍人だったんだ。しかも、鋼の。錬金術師・ってことは、国家錬金術師だったのか。まじかよ、あの歳でえ？

「そりゃあどうも、ご親切に。で、そのついでに海水浴も、ってことなんすかね、公私混同もいいとこだぜまったく」  
エドの歯に衣を着せない態度には慣れっこなのか、マスタング大佐は平然とした態度を崩さないように見える。

「いや、今現在は休暇だからな。」  
「でもさつき、視察って・・・」  
「十秒前から休暇、と俺が決めたんだ。」  
何か文句があるか？

・・・この大佐、昔いじめっ子だったんじゃない？  
往年の伝説のガキ大将を思わせる発言だ。

「ふう、あきれて何も言えねえぜ」  
「なら、問題なし。」

さあて、俺も混ぜてもらおうか。」  
えっ・・・「ええええっ!？」

傍らのホークアイとかいった秘書然とした女性を除いてなぜかその場にいる全員が驚いている。

「さつきのリレーもなかなかだったが、俺に言わせれば、お前のスナップのキレがなっていないな。それと・・・腰の入れ方も・・・云々かんぬん」

「実は大佐はね、学生時代、ビーチバレー部のキャプテンで世界大会に・・・」  
「うっそおおお」

ま、まだやるのかあ、  
それに、どうだ、この燃えるような闘気。  
どこからか取り出した白い手袋をつけて、指を鳴らすと・・・おいつ、  
何だあの手は。

燃えてる、本当に炎で赤く焼けてるよつ。

こいつも錬金術師、かよ。

うそだろ、おい。あんな手で打たれたら・・・

はは・・・もう・・・おしまい、だ・・・。

救いの天使などではない、

滅びを報せる笛を吹く天使だったようだ・・・。

「ようし、いくぞつ。まずはお前からだ。

覚悟はいいかつ、鋼の。

ウルトラ・プロミネンス・フレイミングパイ・サウザンドノック

クイツクシヨットつっつ！！！」

すっぱああん、ぼおおっつっつ。

うああぢぢぢいいいいっつっつっつ・・・

\*\*\*\*\*

きらりん。

「あつ流れ星だ。兄さん、早く早く、

願い事唱えないと・・・ああ、行っちゃったあ」

「お前、替わりに唱えてくれたら良かったのに」

「そつだね。兄さんの手足が

元に戻りますよつにつてね」

「ばーか、お前の身体が先だろ。」

「兄さん・・・」

.....

.....ん？あいつら、まだいるのか。

声がする、ってことは、

俺、まだ、死んでない？生きてる？

身体は？・・視界がまだ暗いからよく分からないけど、

少なくともビーチボールじゃない。

元の身体に魂が戻ってるようだ。

つま先や指先だけかろうじて動くのが分かる。

その他はまだ麻酔がかかったみたいに重たく

マヒ状態のようだが、何とか生きてる。

それが分かっただけで、何だか、うれしくなって、すごくほっとした。

じわあつと涙がにじんでくる・・。

「いやあ、それにしても

兄さんはやっぱりすごいや。

魂を元の身体に戻す錬成なんて

前代未聞じゃないか、って

さすがのマスターグ大佐も

ちっこい目をまん丸にしてたよね」

「へへっ、まあな。いつかは

同じことしないとならないからな。

お前の身体を元に戻して、

その鎧から魂を移さなきゃならないし。

その予行練習って感じかな。

・・でもさ、錬成の時、俺の力、

増幅されてたように感じなかったか？

まるで賢者の石・・いや、まさかな」

「まさか、ねえ。確かにいつもにも増して

神業がかつてた気はしたけど」

「はあ、でも正直、結構危なっかしかつたんだぜ。死ななくって良かったよな・・」

良かったのかな、このあんちゃんにとつても？」

「そりゃそうだよ。まだしびれが取れるまでしばらくかかると思うけど、

きつと感謝してくれるよ、兄さんに」

「そっかな。だといいんだが。

さあて、じゃ、大佐にどやされない内に

一旦イーストシティに戻りますか」

「ええ、もう？大丈夫かなあ」

「このあんちゃんなら大丈夫さ。

一度死ぬような目に遭ったなら

とりあえず自分から死ぬ気はなくなるだろうし、

その後のことは自分で何とかするだろ。

行きたい場所も、そこに行く道も

自分で見つけるもんだし、な」

「そうだね。じゃ、お世話になりました。

僕たち行きますから。

お騒がせしました。さよならー。」

「じゃあな、あばよあんちゃん。がんばりな」

・・行つてしまったか。

やれやれ。本当にお騒がせだったぜ。

待てよ・・。

そっか、やっと気づいた。

あの時、崖をぼんやり見ていた俺に

あいつらが気づいて、一芝居うつたんだな。

第一、あんなちっこい、いや、地球にやさしいサイズの兄を

あのどでかい弟が一人でかつげないわけないだろ。

ま、腹が減つてたのは確かなんだろうけど。  
俺の望んだ姿、ビーチボールに変身させてから  
死ぬような目に遭わせたのも、  
ある程度は計算尽くだったのかもしれない。  
余計なゲストが入ってきたおかげで、  
実際瀕死の際まで追いつめられたが・・・。  
あいつら、結構お節介だな。  
錬金術師、つてみんなあんな感じなのかな。  
いや、もつとずるい奴らもいれば、  
もつと悪に染まった奴らだっているかも。  
どんな優れた能力があつたつて  
しよせん人間なんだから。  
でも、中には、捨てたもんじゃない  
粹で素敵なバカどももいるんだろう。あいつらみたいな。  
俺も、ちゃんと勉強して  
一人前の錬金術師になったら、  
なれるかな、あんな風に。  
なあ、じつちゃん。あんたみたいにさ・・・。  
ようやく動かせるようになった右手が  
自然と胸元に動いて、首に吊しているお守りに触れた。  
ずっと前に袋の中を見たら、  
ちっちゃな赤い珠みたいなものが入っていた。  
じつちゃんが世界中を巡っているうちに見つけ出した  
この世で一番大切な石だ、つて言ってたっけ。  
でも、その大切さは  
錬金術師になつてみないと分からない、とも言っていた。  
じつちゃんの言葉の本当の意味を知るために、  
俺も、なつてみるかな、本腰入れて。  
それで、あいつらに追いついて、その時になつても  
分からなかつたら、聞いてみよう。

この石の大切さが、いったい何なのか。

・・ようやく頭のしびれも取れてきたみたいだ。

明日、目が覚めたら、

とりあえず、復学届書いて、出しに行くか。

そう決めて目を閉じると、心がすっかり安らいで

ここ数ヶ月忘れていた、深い眠りに沈んでいった・・・。

(終)

(後書き)

おそまつさまでした！

拙い戯作とはいえ、

本当に楽しみながら書かせていただいた作品で、

お読みになって少しでも

感じるものがあつたら光栄です。

荒川弘先生、及びアニメ等の制作者の方々に

心からの敬意を表するとともに、

本作品をお読みいただいた貴方に感謝申し上げます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9744f/>

---

まい・らいふ・あず・あ・び～ちぼ～る

2010年10月14日23時07分発行